

AO入試に関する試論(1)

—教養学部におけるAO入試入学者の成績の推移を事例に—

教養学部教授 片瀬 一男

1. 岐路に立つAO入試

AO入試は、1990年に慶應大学（湘南藤沢キャンパス）の新設学部である総合政策学部・環境情報学部ではじめて導入された。この2つの学部は、アメリカ型の大学教育をめざし、「問題発見・解決型」の教育・研究や文理融合・学際的研究、実学重視などを志向するためにAO入試を導入したとされる（山本 2002:53,中井 2007:86）。そして、1990年代を通じてAO入試を実施する私立大学は徐々に増えていったが⁽¹⁾、「AO入試元年」と言われた2000年度入試では、一部の国公立大学に加え、私立大学55校が新たに導入したため、実施大学は75大学155学部に急増した（五島 2004:38）。その後もAO入試を導入する大学・学部は増え続け、『平成19年度国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要』（文部科学省高等教育局）によれば、2007年度入試では、国立大学では35大学（全国立大学の42.2%）、公立大学では17大学（同12.3%）、私立大学では402大学（同71.7%）がAO入試を行っている。またAO入試による入学者は国立大学で2,284名（全入学者の2.3%）、公立大学で364名（同1.4%）、また私立大学では39,225名（同8.2%）を占め、とくに私立大学では無視できない人数となっている。

このようにAO入試が急増した背景には、1990年代後半以降の高等教育行政の転換がある。1997年に中央教育審議会は「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について（第二次答申）」を出し、その2章2節「大学入学者選抜の改善」において、「学力試験を偏重する入学者選抜を改め、能力・適性や意欲・関心などを多角的に評価するため、選抜方法の多様化、評価尺度の多元化に一層努めることが必要」であり、「特に、調査書、小論文、面接、実技検査、推薦文などを活用し、総合的かつ多面的な評価を重視するなど丁寧な選抜を行っていくこと」を大学入試に求めた。そして、アメリカのアドミッション・オフィスを参考としつつも、日本の大学の特性を踏まえた「日本型」AO入試のあり方を検討していく必要性を述べた（五島 2004:36-37）。

さらに2000年には大学審議会が「大学入試の改善について（答申）」の3章2節「アドミッション・オフィス入試の適正かつ円滑な推進」のなかで、AO入試を「選抜方法の多様化、評価尺度の多元化」に資するものと位置づけた。そして、AO入試には「明確な定

義はなく、その具体的な内容は各大学の創意工夫にゆだねられている。このため、現在では大学自らがアドミッション・オフィス入試と呼称しているものがそれであるという状況にある」としたうえで⁽²⁾、一般的にはAO入試はアメリカのように「アドミッション・オフィスなる機関が行う入試というよりは、学力検査に偏ることなく、詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせることによって、受験生の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に判定しようとするきめ細かな選抜方法の一つとして受け止められている」としている。

こうした大学入試改革への圧力は、この時期における初等中等教育の改革とも連動しているとされる。とくに1990年代には、初等中等教育改革の新たなキーワードとして「新しい学力観」が登場した。それは、「自ら学ぶ意欲」をもった児童・生徒の育成を教育目標とする考え方である。このことは、「知識・理解」よりも「意欲・態度」を重視するという初等中等教育行政の転換を意味するものである。そして、この政策の実効性を高めるには、従来の大学入試のあり方を見直すことが不可欠となる。こうした大学入試改革の一端として、学力だけでなく、意欲や関心・目的意識を評価対象とするAO入試の導入が、中央教育審議会や大学審議会によって提唱されたともみることができる（夏目 2002:21）。

また、こうした教育行政の意図とは別に、各大学にもAO入試を導入するメリットはあった。すなわち、従来の大学入試をめざす受験生の準備においては、偏差値等の受験情報に振り回され、「大学の教育や研究内容についてはほとんど知らない、入学後の勉学や将来の生活について考えていない、大学入試合格を自己目的化した勉強をしている」（夏目 2002:22）という実態があった。そのため、大学入学後に目的意識を失い、大学の教育に関心や意欲をもてずに、勉学以外の活動に没頭する学生や中途退学する学生も少なからずみられることになった。こうした事態を打開する方策として、AO入試を導入する大学も多かったとされる。実際、AO入試実施大学への調査でも「勉学目的や問題意識の明確な学生を確保するため」という理由がもっとも多かったという（夏目 2002:22）。

このような状況を背景に、1990年代以降、導入が急がれたAO入試であるが、その拡大に伴って「欲しい学生の獲得」をめざす「選抜型」のAO入試と、「定員確保」を狙いとする「非選抜型」のAO入試に二極化していくとの指摘（山根 2004:23, 五島 2004:35）もある。前者は知的能力や学力を重視したものであるのに対し、後者は大学の大衆化を前提としたものであり、しばしばAO入試の実施時期の早さから「露骨な青田刈り」と批判されるものである（西 2004:27）。こうしたAO入試の導入は、少子化（18歳人口の減少）を背景に、「評価の多元化」という本来の指針が、必ずしも学力の十分ではない層に「実質的

に学力選抜抜きのオープン・アドミッションを広範にもたらず施策」となり、結果的に大学入試の選抜性を低下させることになった（西郡・木村・倉元 2007:23）³⁾。

こうしたなかで、2008年になって、AO入試をめぐって2つの大きな動きがあった。1つは中央教育審議会の作業部会が学士課程教育のあり方に関する小委員会に対して行った報告の中で、推薦入試やAO入試の改善策として、学力検査や大学入試センター試験を判定に用いたり、資格の取得や検定試験の成績を出願資格・合否判定に使うことを提言した。この背景には、「大学全入時代」を前に入学者の学力水準を保つ狙いがある、とされる（『朝日新聞』宮城版2008年1月24日）。もう1つは、いち早くAO入試を導入した国立大学の一部でAO入試を廃止する動きがみられはじめたことである。すなわち、筑波大学の国際総合学類は2009年度入試から、また九州大学の法学部は2010年度入試から廃止の方針を決めている。同様の動きは一橋大学や鳥取大学などの一部の学部・学科でもみられる。AO入試廃止の理由としては、AO入試入学者のその後の成績が他の学生よりも劣っていたことなどがあげられている（『朝日新聞』宮城版2008年2月15日）。

こうした状況を踏まえて、本稿ではまず「AO入試元年」と言われた2000年度から本学に導入されたAO入試で入学した学生の4年間の成績を一般入試・学業推薦入学者と比較する。次に、AO入試合格者の成績が2000年度入学者（2003年度卒業者）から2003年度入学者（2006年度卒業者）の間に、どのような変化があったか検討する。ただし、今回の分析は、入学類型と成績を統合したデータ作成に手間取ったため、教養学部3専攻に限られる。他学部・他学科の分析は別稿を期したい。

本学にAO入試を導入した理由として、斎藤（2001:59-60）は次のような点をあげている。まず第一に、少子化に伴う受験生の減少により、一般入試の合格者の質が低下しつつあるために、入試の選抜機能が低下してきている。これにくわえて、一般入試では不本意入学を減らすことが難しい。また第二に、学業推薦に関しても問題点があり、推薦入試の志願者のなかには、高校内の振り分けの結果として推薦されるために、必ずしも入学意欲が高くない者がいる。第三に、一般入試では普通高校（とくに進学校）の主要な科目について、受験産業も利用しながら受験勉強をすることを前提としている。AO入試は、こうした受験勉強をする上でハンディキャップをもっている者からも、大学教育を受けるにふさわしい生徒を選抜することができる。これによって、ライフチャンスの平等化や優秀な人材の発掘が可能になるだけでなく、新たな入学者市場の開拓にも資することができる。いずれにせよ、AO入試は各学部・学科が、「それぞれの視点から欲しいと考える能力・資質・適性を総合的に判断できる選抜方法」（斎藤 2001:60）であり、これらの特性は一般

入試や学業推薦では十分に把握できないものである、という。

このような理由でAO入試が本学に導入され、すでに4期の卒業生を出している。そこで以下では、教養学部の3専攻の成績という限られたデータではあるが、AO入試で入学した学生の4年間の成績が、一般入試や学業推薦で入学した学生に比べ、どのような推移をたどっているかを、入学年次別・専攻別にみていこう。

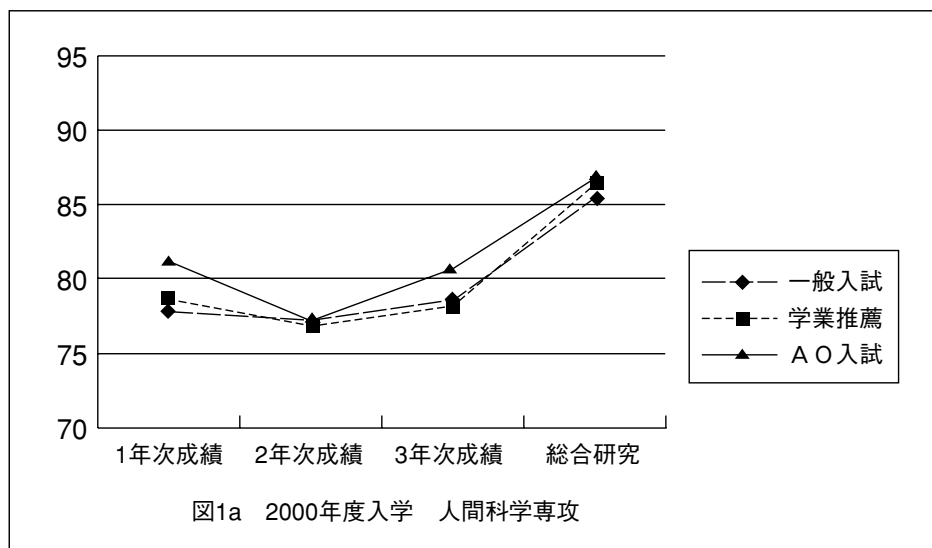
2. 専攻別にみたAO入試入学者の成績：一般入試・学業推薦入学者との比較

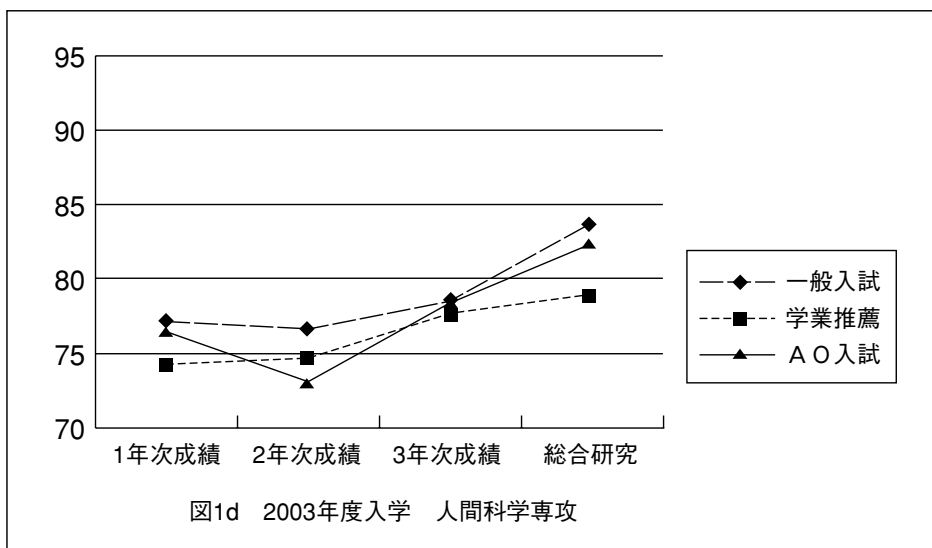
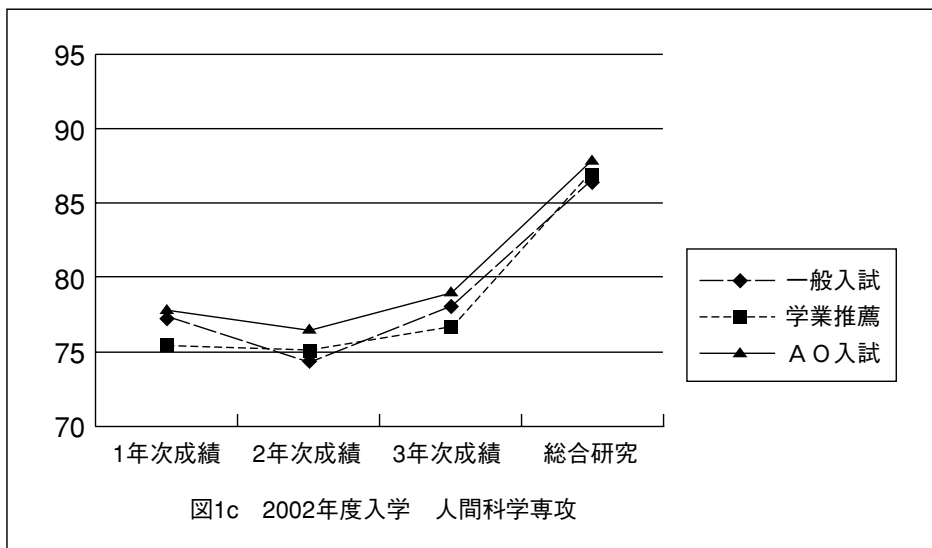
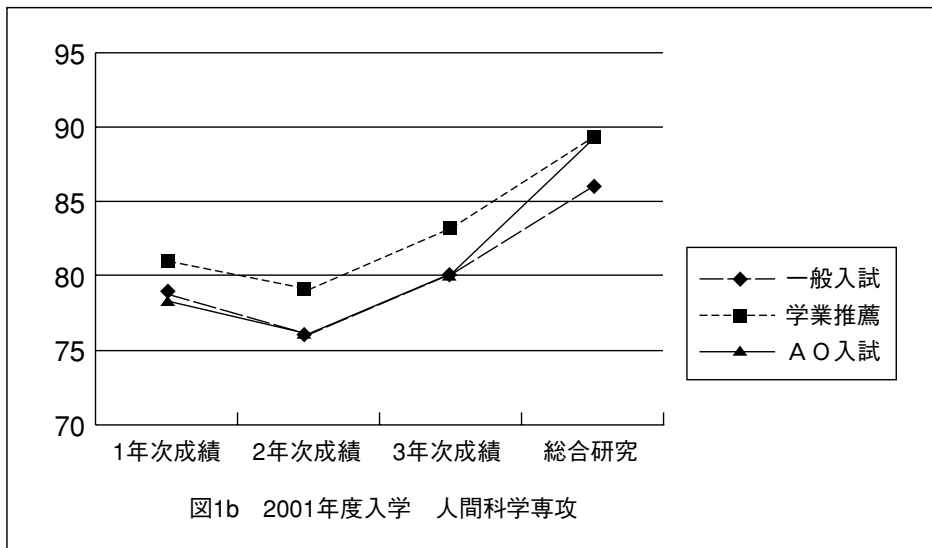
2.1.人間科学専攻におけるAO入試入学者の成績

まず図1aから図1dには、人間科学専攻（現・学科）の2000年度入学生から2003年度入学生について、3つの入学類型（一般入試・学業推薦・AO入試）ごとに⁽⁴⁾、1～4年次の学業成績の推移を示した（なお、4年次では授業を履修している者が少なく、多くの学生が総合研究（卒業論文）だけの履修となっているので、この評価点を示している）。

AO入試一期生が含まれる2000年度入学者の成績からみていくと、1年次の成績ではAO入試入学者が一般入試・学業推薦に比べて若干高かったが、2年次になるとAO入試入学者の成績が低下し、他の入学類型による入学者との差はみられなくなる。他方、専門科目の比重が高まる3年次になると、どの入学類型の者でも成績が上がるが、特にAO入試入学者の成績の伸びが大きい。しかし、4年次の総合研究の成績には入学類型による差異はみられない。

次に2001年度入学者の成績の推移をみると、1～3年次にかけては、AO入試入学者の成績は一般入試入学者と同じ水準にある。そして、この間、学業推薦による入学者の成績





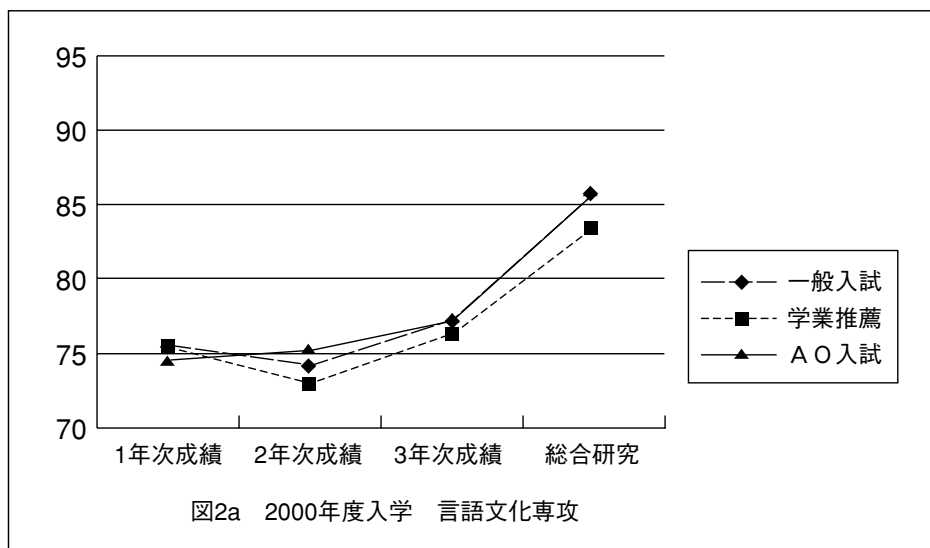
がこの両者を3点ほど上回っている。しかし、AO入試入学者は4年次の総合研究になると成績が上がり、学業推薦による入学者に追いついている。

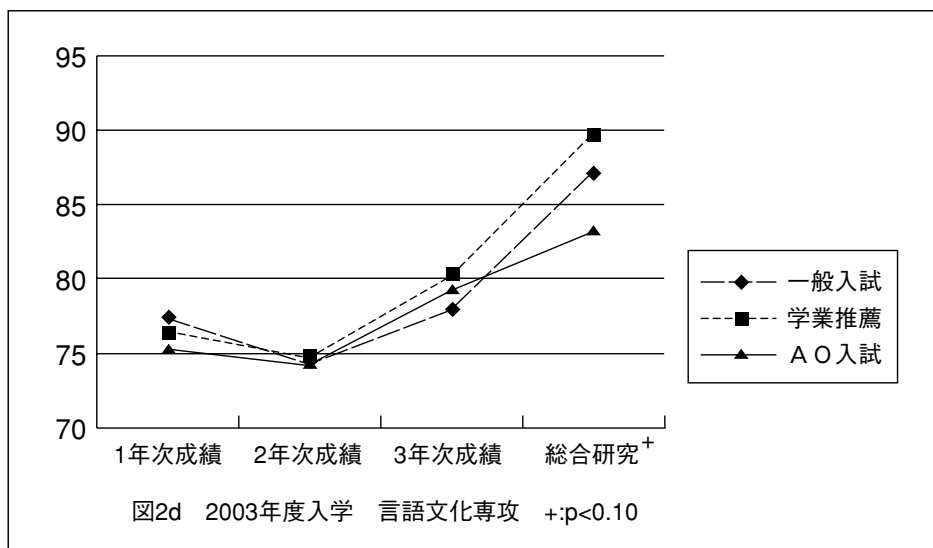
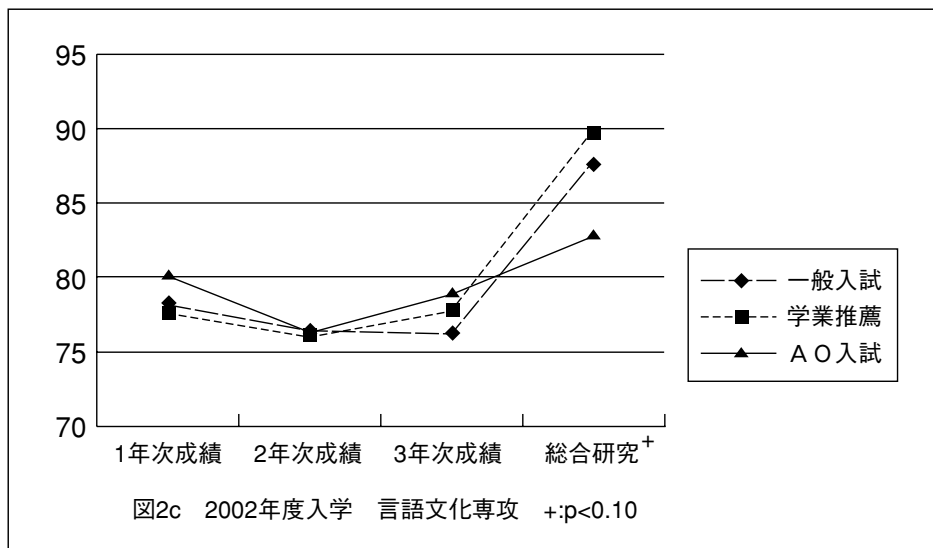
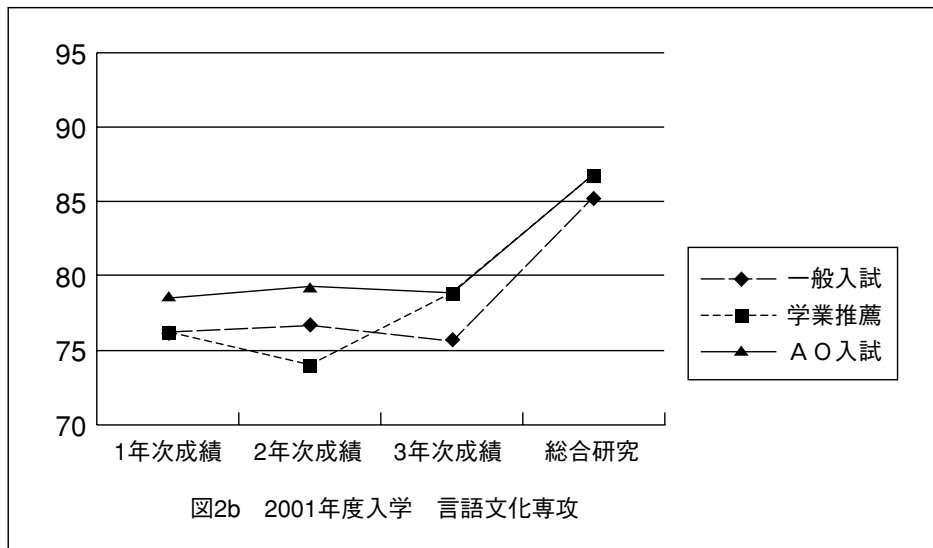
さらに2002年度入学者の場合、AO入試入学者の成績は、4年間を通じて他の入学類型の者に比べて、比較的、良好なものの、それほど目立った差異はみられない。最後に2003年度入学者では、AO入試入学者の成績は2年次に低下するものの、その後は上昇し、4年次の総合研究の成績では一般入試入学者とほとんど差がない。そこで、この4年間の卒業生の成績に入学類型による有意差があるかみるため、一元配置の分散分析をおこなったが、いずれの年度もすべての学年において、入学類型による有意な差はみられなかった。したがって、人間科学専攻に関しては、AO入試入学者の成績は、他の入学類型の学生とほぼ同じ水準にあると言えよう。

2.2.言語文化専攻におけるAO入試入学者の成績

次に言語文化専攻におけるAO入試入学者の成績の推移についてみてみよう。図2aから図2dには、先と同様、2000年度入学者から2003年度入学者の1～4年次の成績を入学類型別に示した。まず2000年度入学者の場合、4年間を通じて入学類型による成績の差異はほとんどみられない。これに対して、2001年度入学者になるとAO入試入学者は、1、2年次の成績が他の入学類型の者より若干、高くなっている。しかし、3年次成績と総合研究の成績は学業推薦による入学者と同じ水準にある。ただし、この2年間に限っては、どの学年の成績でも入学類型によって統計的に有意な差はない。

しかし、2002年度と2003年度の入学者に関しては、1年次から3年次までの成績には、

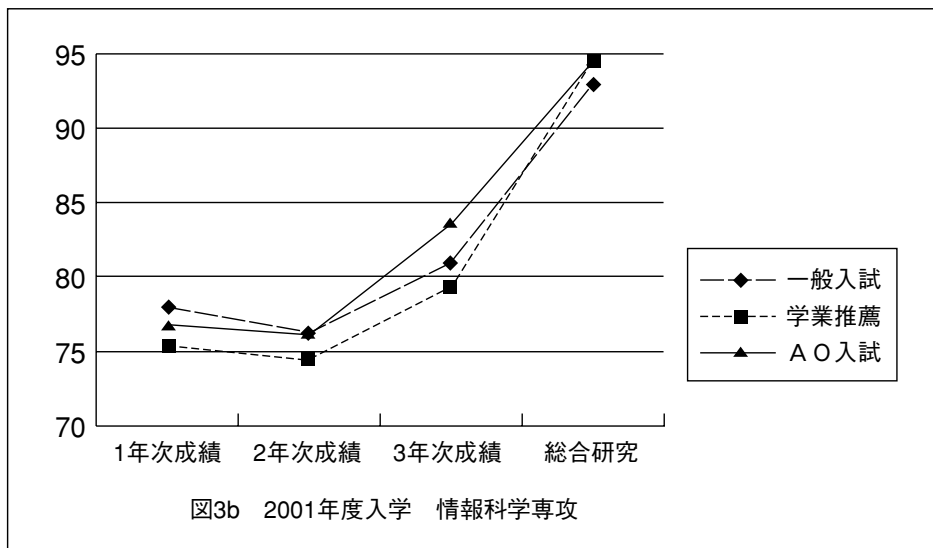
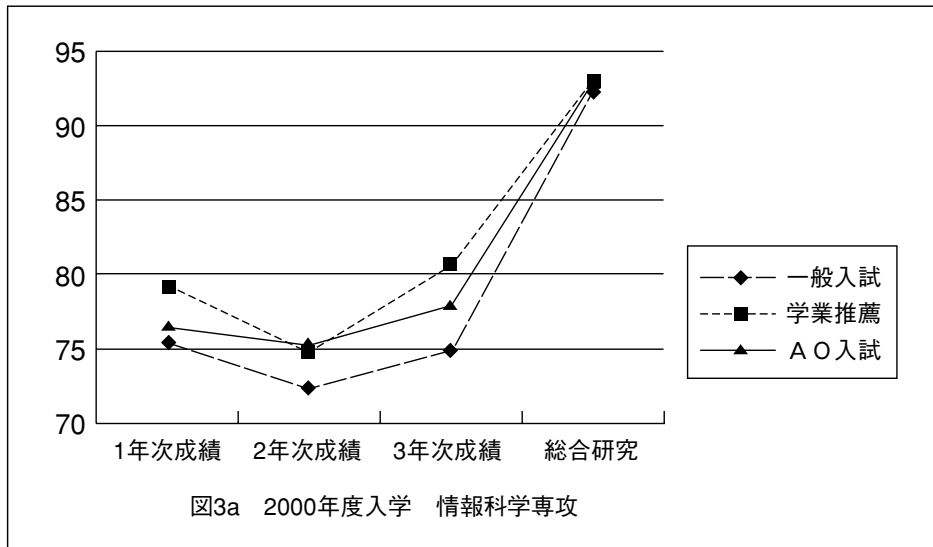


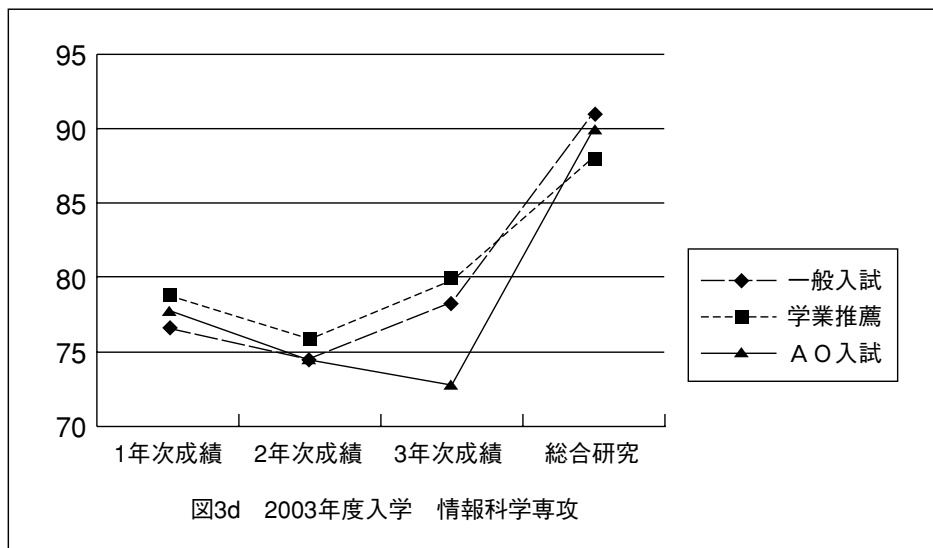
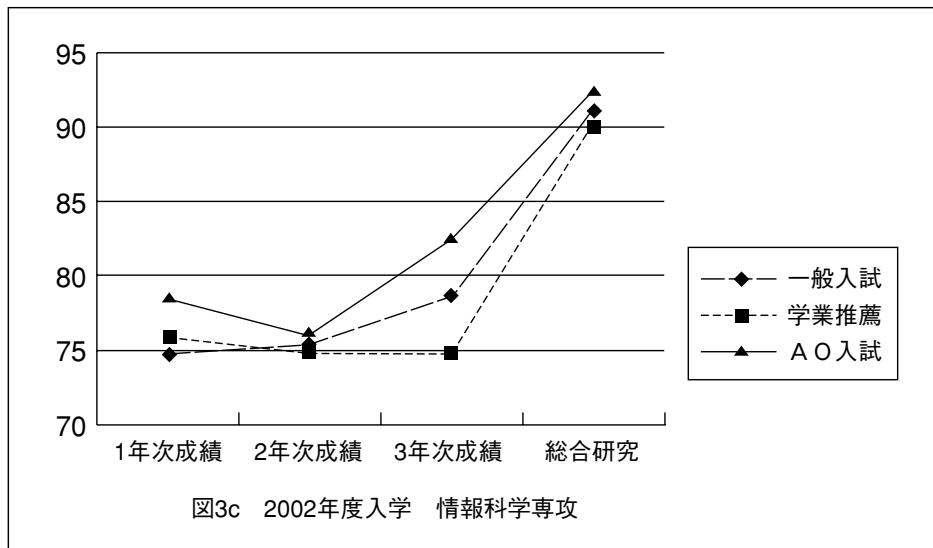


入学類型によって有意な差がないが、4年次の総合研究の成績に関してはどの年度も10%水準で有意な差がみられる(2002年度 $F=2.638$, 2003年度 $F=2.488$)。そして、AO入試入学者の総合研究の成績がもっとも低い。どちらの年度ともAO入試入学者の総合研究の平均点は83点であり、もっとも総合研究の成績がよかった学業成績による入学者との間に7点程度の差がある。

2.3情報科学専攻におけるAO入試入学者の成績

最後に情報科学専攻におけるAO入試入学者の成績について検討してみよう。図3aから図3dは、これまでと同様、2000年度入学者から2003年度入学者について、情報科学専攻における3つの入学類型による成績の推移を比較をしたものである。AO入試入学者は、





2002年度入学者の3年次成績が学業推薦入学者より若干高いのに対して、2003年度入学者では3年次成績が他の2つの入学類型に比べて低い傾向がみられる。しかし、分散分析の結果、いずれの年度また学年とも、入学類型によって成績に有意な差はみられなかった。とくに情報科学専攻においては、言語文化専攻と対照的に、4年次の総合研究の成績に入学類型による差がほとんどみられないことが特徴的である。

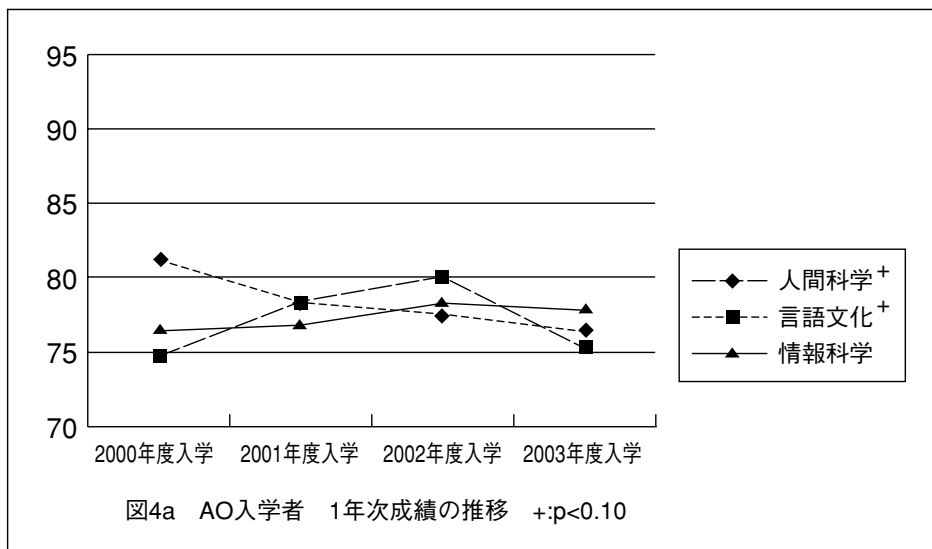
3. AO入試入学者の学年別・年次別成績の推移

ここまでは各入学年次ごとに学年による成績の推移を3つの入学類型ごとにみてきた。この節では、AO入試入学者の各学年ごとの成績に注目し、それが入学年度によってどのような変化を見せているのか検討する。すなわち、AO一期生（2000年度入学者）から四

期生（2003年度入学者）にかけて、各学年の成績は向上もしくは低下したのかみてみる。

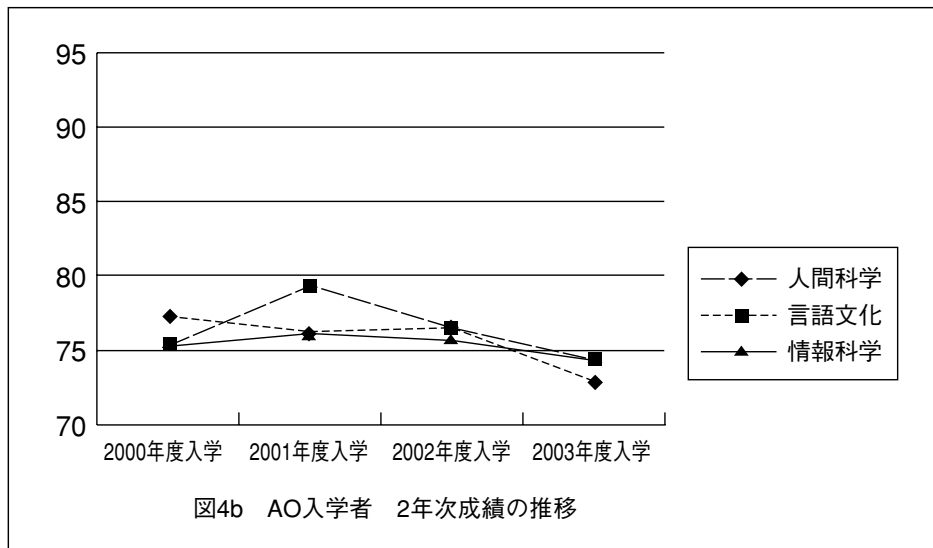
3.1 1年次成績の推移

まず図4aには、2000年度AO入試入学者から2003年度AO入試入学者までの1年次の成績の推移を専攻ごとに示した。入学年度を独立変数とした分散分析の結果、人間科学専攻と言語文化専攻において、10%水準で入学年度によって成績に有意差がみられた（人間科学専攻 $F=2.364$ 、言語文化専攻 $F=2.602$ ）。まず人間科学専攻の場合、2000年度入学生では1年次の成績が81点と3専攻で最も高かったが、その後は78点から76点と明らかに低下傾向を示している。これとは対照的に、言語文化専攻では、2000年度入学生の1年次成績は75点と最も低かったが、その後、上昇し、2002年度入学生では80点となり、3専攻で最も高くなった。しかし、2003年度には75点と大幅に低下した。これに対して、情報科学専攻におけるAO入試入学者の1年次成績は、この4年間を通じて安定的に推移している。



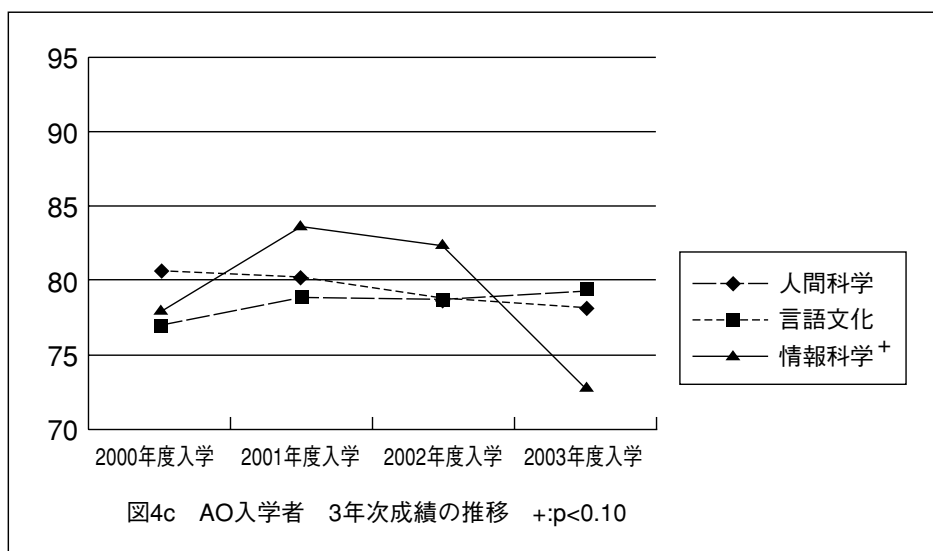
3.2 2年次成績の推移

次に、同様に2年次成績の推移をみてみよう。図4bには、2000年度から2003年度までAO入試入学者の2年次の成績の推移を専攻ごとに示した。分散分析の結果、どの専攻でも入学年次による2年次成績に有意差がないことがわかった。ただし、情報科学専攻や人間科学専攻では、AO入試入学者の2年次の成績は、4年間で比較的、安定しているのに対して、言語文化専攻では2001年度入学者の成績をピークとし、それ以降、低下する傾向がみられる。



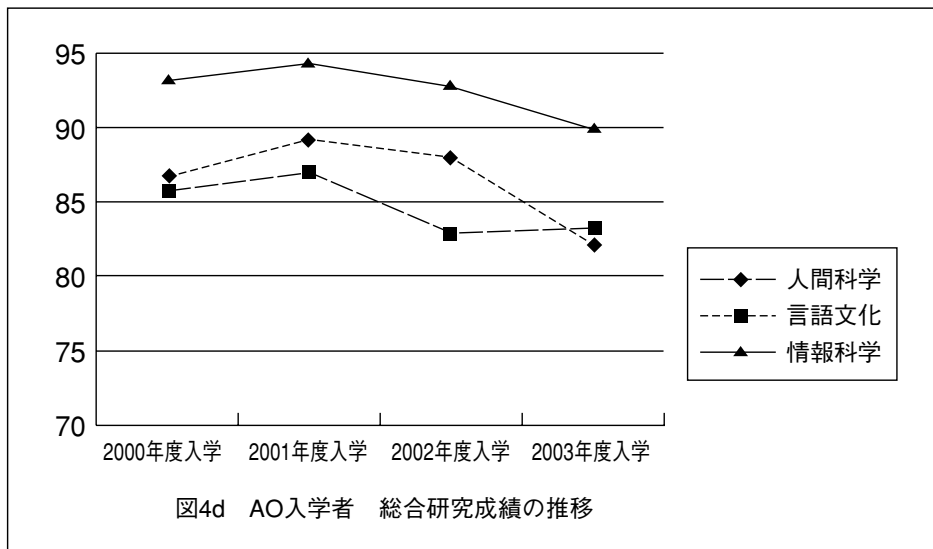
3.3 3年時成績の推移

AO入試入学者の3年時の成績の推移は、図4cに示した。入学年度を独立変数とした分散分析の結果、情報科学専攻においてのみ入学年度によって3年次成績に10%水準で有意な差がみられた。図4cに示されているように、情報科学においては、2000年度から2001年度にかけて3年次成績が78点から84点に上昇したが、2002年度から2003年度にかけては82点から73点と大幅に低下している。情報科学専攻では、先にもみたように、1～2年次のAO入試入学者の成績に関しては、この4年間を通じて安定していたが、専門科目が中心となる3年次になると、入学年度によるばらつきが現れてくるといえよう。



3.4総合研究成績の推移

最後に、図4dには、4年次の総合研究（卒業論文）におけるAO入試入学者の成績の4年間の推移を示した。分散分析の結果、どの専攻においても、入学年次によって総合研究の成績に統計的にみて有意な差はなかった。しかし、3つの専攻とも2002年度入学者において成績のピークを迎えたものの、それ以降は成績が低下する傾向がみられる。



4. 要約と課題

最後に今回の分析から得られた知見を要約し、今後の課題を提示したい。本研究で得られた知見は2つある。まず第一に、本学にAO入試が導入された2000年度入学生から2003年度入学生については、少なくとも1年次から3年次に関しては、教養学部におけるどの専攻でもAO入試入学者の成績は、一般入試・学業推薦入学者の成績とほぼ同じ水準にあった。しかし、4年次の総合研究に関しては、言語文化専攻においてAO入試開始から3年たった2002年度入学生より、AO入試入学者の成績が、他の入学類型に比べて有意に低くなる傾向が現れ始めていた。第二に、経年（入学年度別）でAO入試入学者の成績の推移を学年別にみたところ、1年次の成績に関しては人間科学・言語文化専攻において、また3年次の成績に関しては情報科学において、とくに2003年度に有意に低下する傾向がみられた。しかし、2年次の成績および総合研究の成績においては、いずれの専攻も4年間を通じて、比較的、安定していた。

これまでAO入試入学者の成績に関する追跡調査は、国立大学を中心に行われてきた。それによると、九州大学（法学部・薬学部・農学部）ではAO入試入学者は、一般教育科

目中心の「全学教育」科目でも、また学部での「専攻教育」科目でも、一般入試入学者と同等かそれ以上の成績をおさめている、という（渡辺 2005:148）。また筑波大学（工学システム学類）では、AO入試入学者の1年次成績は、一般入試入学者に比べると、講義形式の授業での筆記試験では低いが、レポート提出や制作課題を伴う授業では高いことが指摘されている（白川・島田・渡邊・山根 2004）。また、この学生を卒業時点まで追跡したところ、AO入試入学者は学類の標準的な科目以外の授業を履修し、自らの学習目標によって多様な科目選択をしており、また卒業研究の評価は他の入学類型と同等かそれ以上であった、という（白川・島田・渡邊・山根 2005）。その一方で、福井大学（工学部）で1年次の成績を調べたところ、AO入試入学者は、一般入試入学者に比べて、「共通教育科目」においては好成績をおさめるものの、「専門基礎科目」においては中上位の成績を示す者が少ないことも報告されている（大久保・郡司 2006:73）⁽⁶⁾。このように、AO入試入学者の成績に関する追跡調査は、各大学でまだ緒についたばかりであり、その知見も錯綜している。今後もAO入試入学者の成績に関する追跡調査を続けていく必要はあるだろう。実際、本研究でも教養学部3専攻の4年分の卒業生に関する成績しか分析していない。今後は他学部・他学科についても同様の分析を行いたい。

またAO入試の趣旨に鑑みると、成績というパフォーマンスの追跡調査だけでなく、学習態度や意欲、大学適応などについても、他の入学類型に比べて差異があるか調べる必要があるだろう。これによって、AO入試が導入当初の意図すなわち基礎学力だけでなく関心や意欲なども対象とした多元的な入学選抜を実現しているか検証することも可能になると考えられる。実際、こうした意識や意欲などに関する研究は、国立大学を中心に行われている。それによると、AO入試入学者は一般入試入学者よりも目的意識が明確で、満足度が高いこと（大久保・郡司 2006:74）、一般入試の前期日程合格者よりも勉学意欲が高く、大学院への進学意欲も高いこと（山岸 2004:58）、また入学後の学習目標をもっている者が多く、進学学部への適合感も高く、退学者を出さなかったこと（渡辺 2005:150）などが報告されている。その背景には、AO入試入学者は、入学以前に積極的に大学に関する情報を集め、それをもとに明確な目的意識をもっていることがあると言われる。実際、AO入試入学者は、一般入試入学者よりも、ホームページの閲覧やオープン・キャンパス参加、体験入学、研究室訪問などを通じて志望大学・学部に関して積極的な情報収集をしていることが、北海道大学（山岸 2004:58）や九州大学（渡辺 2005:148）で報告されている。また、東北大学の工学部でも、AO入試入学者は、高校3年時のオープン・キャンパス参加率が高く、またオープン・キャンパスが進路決定や出願に影響したと考える傾向に

あるという（鈴木・夏目・倉元 2003:9）。この点では、AO入試導入時に期待された意識や行動傾向をもった生徒が選抜されているとみることもできる。

しかし、その一方で初期のAO入試入学者にみられた特性が、その後、経年的に変化する可能性も指摘されている（渡辺 2006:115）。実際、本研究の分析からも、教養学部の一部の専攻ではAO入試導入後3年たった2002年度入学生の総合研究（卒業論文）の成績が、一般入試・学業推薦入学者よりも有意に低くなっていた。総合研究はいわば教養学部における学士課程教育の仕上げともいべき科目である。したがって、その成績がAO入試入学者において他の入学類型に比べて今後も低い傾向が続くならば、AO入試がほんとうに学部の専門性に適合した学生を選抜しているのかという疑義が生じかねない。

さらに教養学部における4年間の成績の推移からみても、AO入試入学者の成績の一部が、2003年度入学者から、それ以前の入学者に比べて低下する傾向がみられた専攻もあった。このような傾向が他学部・他学科でもみられるならば、本学におけるAO入試の選抜機能が低下しているのではないかという疑問も出てくる。今回は教養学部3専攻における4年間の成績の推移に関する分析にとどまったが、今後は他の学部・学科に関してもAO入試入学者の成績の推移をみることによって、AO入試が適正な選抜機能を果たしているのかについて検証を行っていくことが課題となる。

注

- (1) 1994年には松山大学、95年には名古屋商科大学、96年には千葉商科大学、また97年には鎌倉女子大学、98年には札幌国際大学・愛知学院大学・同志社大学、さらに99年には立命館大学など5大学がAO入試を導入し、1999年度までに13大学30学部がAO入試を実施するに至っていた（五島 2004:38）。
- (2) 実際、AO入試は推薦入試と異なり、募集人員の比率や開始時期に関する規制はなく、この点では「入試に関する諸規制を大幅に緩和して、学生募集に関する大学間の競争を促す」（夏目 2002:21）ことが意図されているとも言われる。
- (3) 最初にAO入試を開始した慶応大学の2学部ですら、導入5年後くらいからAO入試合格者と一般選抜合格者の差が縮まり、「AO入試で全体を底上げする」という戦略は2000年頃には破綻していたという見方（中井 2007:91）すらある。
- (4) なお、この分析からは、これ以外の入学類型（TG推薦、スポーツ推薦、キリスト者推薦、編入学・転学部・転学科）による入学者は除いている。
- (5) なお、福井大学ではこの原因を探るため、高校の進路指導部教員と議論した結果、AO入試の実施時期が早いために、高校3年次2学期の学習がおろそかになっており、十分な基礎学力が身に付いていないと推測している（大久保・郡司 2006:73）。たしかに、AO入試の実施時期の早さが、高校教育に及ぼす影響は従来からも懸念されてきたが、今後もAO入試が後期中等教育に与える影響については留意が必要であろう。

文献

- 五島敦子, 2004, 「日本におけるAO入試研究の変遷」『教育史研究室年報』(名古屋大学教育学部) 10: 35-57.
- 中井浩一, 2007, 『大学入試の戦後史: 受験地獄から全入時代へ』中公新書ラクレ.
- 夏目達也, 2002, 「AO入試の現状と課題」『IDE』 443: 20-25.
- 西研, 2004, 「京都精華大学人文学部におけるAO入試の現在」『IDE』 457: 24-27.
- 西郡大・木村拓也・倉元直樹, 2007, 「東北大学のAO入試はどう見られているのか?: 2000~2006年度学部新入学者アンケート調査を基に」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』 2: 23-36.
- 大久保貢・郡司達夫, 2006, 「福井大学AO入試入学者の学業成績・学生生活」『大学入試研究ジャーナル』 16: 71-76.
- 斎藤誠, 2001, 「[東北学院大学]アドミッションズ・オフィス入試: 1次(書類、面接)、2次(小論文、小テスト、面接)」高等教育情報センター編『AO型入学選抜の多様な“進化”[下]』地域科学研究会: 56-71.
- 白川友紀・島田康行・渡邊公夫・山根一秀, 2004, 「筑波大学AC入学者の追跡調査: 平成12年度入学者の3年目と14年度入学者」『大学入試研究ジャーナル』 14: 65-71.
- 白川友紀・島田康行・渡邊公夫・山根一秀, 2005, 「筑波大学工学システム学類AC入試追跡調査: 卒業までの4年間の総括」『大学入試研究ジャーナル』 15: 99-104.
- 鈴木敏明・夏目達也・倉元直樹, 2003, 「オープンキャンパスとAO入試」『大学入試研究ジャーナル』 13: 7-10.
- 渡辺哲司, 2005, 「AO入試と大学における学習」『大学教育学会誌』 27(1): 146-51.
- 渡辺哲司, 2006, 「国立大学入試による入学者の特性」『大学教育学会誌』 28(1): 110-116.
- 山岸みどり, 2004, 「北海道大学AO入試: 平成13年度~15年度」『大学入試研究ジャーナル』 14: 57-62.
- 山本志郎, 2002, 「慶應義塾大学SFCの入学選抜政策」『IDE』 443: 52-56.
- 山根一秀, 2004, 「AO方式による入学者選抜の現在」『IDE』 457: 19-23.